

kaleid Sekai —誓いの音色—

オーシャンビューバー太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

全てを失った少年は雪の降る日に、

一月は無く、星も無く、道は、闇に溶けた。

ーだがそれでもー

ーそれなのにまだ：体が残っているー

そして、全てを出し尽くし■■■を越え、

これは、とある「セカイ」にて、ある男が平和に？生きようとする、ただそれだけの話。

## 目次

零話	正義も 悪も 全て赦す音色へと変えよう	1
一話	誓いはとうに消え	4
二話	過去を捧げよう	7
三話	輝く星々	10
四話	雨上がりて日出づる	13
五話	女難の相1  (宮女編1)	17

零話 正義も 悪も 全て赦す音色へと変えよう

「ふう…これで今日の練習は終わりかな?…にしてもセカイは凄く便利だね。幾ら練習しても誰にも迷惑かからないもん。」

その一歌の言葉に皆頷く。

「だね。ホントにここ最高!今度ここで打ち上げでもする!」

「ふふ。そうだね。その時は料理も頑張って作るね!」

「はいはい、早く片付けするよ。」

そうやってLeo/needの皆が談笑していたとき、ひとつの落下音が聞こえた

「え?」

ドサツ!つという音に皆が大急ぎで屋上に登ると、そこには、赤銅髪のパロボロの服を着た少年がいた。

「だ、大丈夫ですか!」

とみんなが駆け寄るが、傷が多く、気絶していた。

「取り敢えず運ばないと…」

「しばらく私の家、誰もいないからそこまで運ぼう!」

ある男は夢見た

—この世全ての救いを

ある男は選んだ

—種の継続を

そして俺は願った

『君に救いを。ここで終わらせるには、勿体ないからね。』

「ん…ここは…?」

「あ!起きたんですね!良かったああ…」

と、彼女は心底喜んでいた。

まるで救われたのが…

「ええと…私の名前は望月穂波です！貴方の名前を聞いていいですか…？」

「あ、ああ…俺の名前は…衛宮士郎だ。助けてくれた…のか？」

「まあ…そうなるかな？」

そして士郎は辺りを見渡し、女性の部屋であることを察知（まあ士郎が女性の部屋を知らないので勘でしかないが）し、

「それで…ここは…？」

と一応確認は取る。

「ほんとは私の弟の部屋で寝かせてあげたかったんだけど…ベッドが無かったから、今は私の部屋だよ。」

その言葉にうつむき、

「ごめん。ベッド…汚しちゃったよな。」

「え？…あ、全然気にしないで！というか、…その…」

と急に顔を紅くし、もじもじしながら、

「その…傷も診ておきたかったから…」

「？」

「服！ぜ、全部では無いけど！ぬ、脱がせました!!？」

それを聞き、軽く布団を上げると…

「……なんでさ…」

穂波は怒られると思っっているのだが…

「はあ…別に気にして無いさ。感謝こそすれ、怒りなんかしないよ。」

「へ…？」

そんな彼女を安心させたいと思い、つい、かろうじて動く右手を彼女の頭に乗せ撫でた。

（ああ、そういえば俺、結局あいつに頭すら撫でてやれなかったな…もっと先輩らしいこととしてやれば良かった…ごめん、）

「桜…」

「え？」

どうやら口から漏れてたらしい。

「悪い。まだ過去に執着してたらしい…」

穂波はその呟きに微笑し、

「実は、私も少し前まで、過去に執着してたんです。」

「そうなのか？」

「はい。今は大事な幼馴染みに助けられて、ちゃんと大事なものを見つけたから！」

と、飛びつきりの笑顔を見せた。

その笑顔に見とれていると、可愛らしいグーという音が聞こえた。

「あ、その、晩ご飯にしましょうか…？」

また頬を染めている。

「せっかくだ。俺に作らせてくれ。」

「え？いや、土郎さんは病み上がりですから…」

「いいんだ。…これでもちよつと自信、あるからさ。」

ここが何処かも分からないままだけれど、それでも、この新しい後輩のためにも、恩を返すためにも、と、腰を上げ、衛宮士郎は台所へと向かう。

因みにこの時穂波に絶賛され、そのまま士郎に弟子入りしたのはまた別の話。

## 一話 誓いはどうに消え

「なんでや…」

士郎は今困惑している。何故なら少し隙間はあるものの、隣のベッドには、

「スー…スー…」

可愛らしい寝息をたてる穂波の姿が。

全ては数時間前、晩飯の肉じゃがを完食した後…

「ねえ、士郎さん」

と穂波から辛そうな表情で、

「ん？どうした？」

「なんで…笑わないんですか？」

そう聞かれた。

「そう…か…笑えてない…か…」

そんなことを呟き、士郎は決心した。

「…俺さ、最低の悪なんだ。」

「それはどういう…？」

「そのままの意味さ。俺はたった1人を救うために全てを捨てた。勿論、世界も。」

「……」

「そして何より俺はそのたった1人を、妹<sup>美遊</sup>を最後まで救えたか、覚えてないんだ」

「そんな…」

「ああ、ほんとに最低だ。記憶喪失なんて一言で片付けられることではない。…もう俺は、どうすれば良いのか、分からないんだ。ただ1つ誓ったことももう済んでしまった…と思う。多分、この残ってしまった命も、それに使いきるつもりだったはずなんだけどな。」

なんて自嘲気味に言う。

そこまで黙っていた穂波が唐突に、

「士郎さんは、凄いなあ…」

と感動が入り交じって、涙目になりながらそう呟いた。

「え…」

「私、弟がいるんですが、弟と仲良く出来なくて、今は学校の近い祖父母の家に住んでるんですけど…あつ、ごめんなさい、変な話しちゃって…」

「ううん、寧ろ、俺なんか話してくれてありがとう。」

「士郎さん…」

「飯食わせてもらってありがとな。じゃあ俺はそろそろお暇するよ。」

その瞳には何か覚悟が決まってしまったものが見えて…

「帰るところ、あるんですか?」

「さあな。そのうち、見つかるんじゃないか?」

ああ、その目は駄目だ。だから私も、覚悟を決める。彼よりは弱くても…!

そして、爆弾が投下される。

「……士郎さん、私の家に泊まりませんか? 貴方の居候先を探すまで。」

「は?」

余りにも拍子抜けだった。

「私は、貴方を救いたい。…1人で苦しむ辛さがよく分かるから、貴方が自身を救わないなら私が貴方を救います! 私が救われたように!」

その決意をした眼に何を見たか士郎は大きな溜め息を吐き、

「分かった。…けど、後悔するかもだぞ?」

と試す様に見る。

「絶対に、しません。」

「…分かった。…ちゃんと親御さんに説明しろよ?」

「はい!……ああ。」

「あ?」

「えっと…その…そういえば両親は結婚記念日で海外に行ってましたので、どちらにせよあと一週間位帰ってこないんですが…」

「忘れてたのか…」

「今日が刺激的過ぎて…と、取り敢えず！今日1日は土郎さんが逃げるかもですので、その…私の隣で寝てもらいます…！」

「な、なんですか…」

「…そうして冒頭に戻る…」

「ハア…結局、命を使い潰すことなく、か…」

それでも彼は、

「俺は幸せを享受してはならない。それが、それくらいしなくちゃ、俺が世界を裏切った罪の清算にもならないから。」

1人の少年は、ここに又、誓いを立てる。

それと共に、もう1つ、隣で寝息を立てる少女を見て、

「助けて貰った分は、救わなきゃな…」

このときは誰が想像しただろう。彼の背負うモノは段々、膨れ上がってること。だが、それでも彼は正義悪を為す。

その夜、彼はもう1人自分の中の自分の夢を見た。

「僕はね、正義の味方に、なりたいんだ…」

## 二話 過去を捧げよう

「流石に、穂波が学校に行つて暇になつたな…」

と土郎は時計を見る。あと二時間で帰つてくるだろう。そういえば、俺を発見したときに他にも何人かいたらしい。今日はその皆を連れてくると言っていた。

「取り敢えず渡されていた金で客用料理の食材を買つてきて下ごしらえも済ませたし、あとはやり始めたら10分くらいで出来るか？」

本来、穂波がする筈の料理。つい癖で、と殆ど済ませてしまったが彼は自覚していないのだった…

「…少し、街探索でもしてみるか。」

とある公園にて

「にしても、なんか聞いたことある教会とかあつた気がしたが……つと」

公園の前を歩く綺麗な銀髪の少女がフラフラしながら歩いている。

「…行くか…」

「うう…暑い…」

流石に気温が27度の時に行くもんじゃない。望月さんが来るのも週末だ、と思つてカップヌードルを買うのに無理してしまった。

そして遂に石につまづき…

「あつ…」

キャッチされた。

「大丈夫か？」

赤銅色の髪の男は、自分を焦つたように見ている。琥珀色の瞳はどこか、虚ろに…

ああ、その表情は駄目だ。まるで私の…

「本当に大丈夫か？」

「あつ…ごめん…なさい…」

「別にいいよ。それより歩け…そうに無いか。ならよいしょつと。」  
「えっ…？」

「家まで送るよ。倒れかけの女の子一人を見捨てるなんて出来やしな  
いき。それに、可愛い見た目してるんだから、襲われるかもだろ？」  
初対面の人に可愛いなんて言うのは…と思うが表情から見て完全  
に本心だ。…少し火照ってきた。

「…じゃ、じゃあ…」

と言われるがままに背負われ、家まで行く。

そして玄関に着いたタイミングで、

「…飯、無いのか？」

「え…？いやここに…」

とカップ麺の袋を見せる。それを見て男の人は頭を抱え、

「年頃の女の子がそんなもん食ってばっかじゃ育たねえぞ？…俺が作  
る。幸い、買ってきたヤツに余剰あるし。」

「別に、そんな、助けてもらって…」

「良いんだよ。俺のエゴで救っているんだから。」

ああ、なんだろうか。その言葉はあまりにも強すぎて、何処か弱さ  
が見えるのは。

「…安心してくれ。10分、いや5分で作れる」

「じゃあ…お願いします…」

と彼は、7分ほどでサンドイッチを作って見せた。しかも健康にも  
よさそうだ。食べてみると…

「す、凄く、美味しい。」

思わず笑みが漏れてしまうほどに、美味しかった。玉子の甘さ、鶏  
肉のジューシーさ、そしてレタスのサツパリ具合。全部を取っても最  
高だった。

「それは良かった。」

そしてもつきゆもつきゆと食べていき、食べ終わると、

彼は帰る準備を手早く済ましてしまうので、

「ご、ごちそうさま！わ、私は、宵崎奏！あの、名前は…？」

「俺は…」

彼はそこで何か逡巡して、

「俺は衛宮士郎。また、どこかで会おう。」

と、軽く微笑んで帰ってしまった。

儂げな彼に、どうか救いを。いや、私は…

「…救える曲を作らなきゃ。いつか会うかもしれない彼も。」

口に残る香ばしさを糧に、奏は人を救う一步をまた、踏み出していく。

そのあと、その正義悪の味方と会うのは意外とすぐだったりする。

### 三話 輝く星々

士郎は家に帰り、まだ帰ってきてないことを確認すると、最後の作業に取り掛かった。と、そのタイミングで、

ガチャ

「「おじやましませーす！」」

「ただいま、士郎さん！…遅くなっちゃいました！今から作りま…え？」

「ん？…あと仕上げ始めれば5分で作れるぞ？」

「士郎さんの為の会食ですよ!?病み上がり?なのに仕事しすぎです!仕上げは私に任せて、いっちゃん達と自己紹介でもしてきて下さい！」

「わ、分かった分かった」

と、結局追い出されてしまう。

そして…

「ええと…俺の名前は、衛宮士郎。特技は、まあ…一応弓道やってたよ。家事は得意だと思う。その…なんだ…よろしく頼む。」

こんなこと余り無かった士郎はしどろもどろになってしまう。

「えつと…私は星乃一歌と言います。穂波とバンドを組んでいて、ボーカルを担当しています！」

「ん？穂波？」

1つ聞こうと台所にいる穂波に声を掛ける。

「はい？」

「バンドって何だ？」

「……へ？」

「…ああいや、うちの学校、とある災害のせいで、あんまり学校に人が居なくてさ。そういう娯楽とか趣味持つてる人も少なかったし…」

「えつと、音楽のユニットみたいな感じで…」

空気が、重い。

「…悪い。そうだ、よかったら好きなものとか教えてくれるか？」

「え…えと、ポーカロイドの初音ミクっていう子と、焼きそばパンが好きですー！」

「あくどおりで買ってきたやつに焼きそばの材料が多かったのか…」

そのつぶやきに目を輝かせて、

「ほんとー！ありがとうございますー！」

「いや、お礼は穂波に言ってくれ。俺は買いに行っただけだからさ」

「ありがとう！穂波！」

「ふふっ、どういたしまして、一歌ちゃん。でも士郎さんも病み上がりで行ってくれたんだから、ちゃんとお礼されるべきだよ？…それとも照れ隠し？」

とからかってくる。

「なんでさ…」

「あー私はまだだった！私は天馬咲希です！好きな物はスナック菓子とレオニの皆です！よろしくお願いしますー！」

「お、おう…よ、よろしく…」

「…やっぱり女性慣れしてないんだね…」

「うぐっ…仕方ないだろ、身近な女の子、妹と後輩くらいだったし…」

そうやって会話していると、銀髪の子が出てきて、

「私の名前は日野森志歩。先に言っとくけど、穂波に手を出さないで。貴方が何者かはわからないけど、手を出したら承知しないよ。」

その言葉に士郎は、目を丸くしてから、少し微笑み、

「なんだ。友達想いなんだな、君は。」

「なっ…べ、別にそういうのじゃ…」

「志歩ちゃん！嬉しいよー！」

「ちよ、分かったからひつつかないで！…でも、さっき言ったことは本音だから！」

その言葉にどこか安心したような表情で、

「もちろん。」

そのつぶやきは志歩にしか聞こえてないかもしれないだが、

(なんでそんなに寂しそうなのかな…?)

「みんなく料理できたよ〜!」

「すまん、手伝うよ。」

その日、穂波の家には「美味しい!」が沢山聴こえたのだとか。  
一人の悪は次第に平和を享受する。

ああー

あのとき、見えなかった、星空が…

## 四話 雨上がりて日出づる

晩餐会?の次の日。買い物帰りの士郎は、

「はあ…碌でもないな、本当。」

大雨に打たれていた。何とか雨を遮れるところまでは来たものの、  
「うくん、若干濡れたし、いつ止むかもわからないし、暫くここで雨宿りでも…」

とそこに数秒前の自分と同じくダダダツと走ってくる音がし、そちらを見ると、

「…あれ?士郎さん?」

ギター?で頭を覆って走ってきた志歩だった。

「よっ。昨日ぶり。」

「こんにちは。……………傘、忘れたんですか?」

「うぐっ…ニユースは見てたつもりだったんだが…それを言うなら、志歩もそうなんじゃないのか?」

「うぐっ…私は、その…荷物を持ってたから…」

「そっか。」

「……………士郎さん。」

「ん?」

「私の家、来ませんか?ここからなら3分で着きますし…お姉ちゃんにも連絡入れとけばお風呂も入れますし…その間に穂波にもメール入れますし。ケータイ、持ってないんでしょ?」

数秒考えたあと、

「……………乗った。」

—日野森家—

「ただいま。」

「お邪魔します…」

「あらしいちゃん、おかえり〜」

と出てきたのは水色のふわっとした長い髪をもつ青い目のおっとりとした少女だった。

「ええっど…そちらの男の人は…「この人は、」しいちゃんの彼氏!」

「違います」

「良かったあくお名前を聞いてもいいかしら？」

「えっと、俺は衛宮士郎。志歩達に助けられて知り合っただけだ。若干記憶喪失気味だが…あなたは志歩のお姉さんってところか？」

「ええ、そうよ。私は日野森雫といいます。よろしくね、士郎君」  
(どっちのほうが年上なんだろ…)

志歩は少し気なっていた。

「話は聞いているわ。シャワー浴びて来てね」

「士郎さん、先に入りなよ。」

「え…でも…」

流石に自分の家なんだから。それに…

「女の子が濡れたままって良くないだろ。風邪も引くかもしれない…」

「なっ…」

このとき志歩は焦っていた。

(なんでこんな必死になってるの!?!もしかして…透けてる? いや、それだったら目線がもつと…いや、士郎さんも妹居たみたいだしもしかして余り気にしてない…?)

うーんうーんと悩み、諦めた志歩は士郎に、

「さっさと入って…来なさい!」

「なんでさ!」

落ち着いて確認するためにゴリ押しした。正確には蹴っ飛ばした。

「…お姉ちゃん、士郎さんに合う服ある?」

「うーん? お父さんのならもう洗濯機の上に置いていたけど…」

「いや、絶対アレは私服じゃないでしょ。」

「大丈夫よ! ……あら、言ったら上がってきたわ」

「な…」

「あがったぞ。志歩、さっさと入れよ。…ってかなんで俺の普段の部屋着知ってるんだ? いや、貸してもらえるのはほんとにありがたいんだが…」

そこには完璧に和服？を着こなした士郎がいた。

「な、なんでそんなに着こなしてんの…」

「え…まあ、昔、いろいろ、な？」

とりあえず、だ。色々貸してもらったりと恩があるからな、晩飯くらい作らせてくれ。」

「え…そんな、気にしなくてもいいのよ？…でも」

と切つて志歩の方を見た。

「しいちゃんが士郎さんの料理、凄く絶賛してたし…」

「お姉ちゃん!？」

「はは、それは嬉しい限りだ。」

「あら？…雨が止んだわね？」

「そういや穂波に買い物した分渡さなきやだな…今日の晩飯になるし…しかし服は洗濯中だしな…」

「…：はあ、穂波呼んどいたから気にしないで。後、うちの親は2人も帰り遅いから。…風呂、入ってくる。」

「すまん、助かる。んじゃ、4人分か…下ごしらえでもしとくか。」

そこからの士郎は手際が良かった。

「雨だったけど、かなり暑かったしな…」

○

ピンポンという音が鳴った。

「穂波ちゃんかな？開けてくるわ。」

「お邪魔します。あ、士郎さん！心配しましたよ、帰ってくるの遅かったから、つてなんですかその格好!!凄く似合ってます!!」

「そ、そうか？その…なんだ、ありがとう？」

「えっ、あつ、いえ！私も手伝いますね！」

「おっ、それは助かる。」

〜10分後〜

「ぶっかけうどんの完成だ。色々作ったから好きな物乗つけてくれ。」

「「おお〜!」」

「美味しい…!美味しいわ、士郎さん！」

その言葉に珍しく頬を緩めて、

「そうか、そりや良かった。…でも、今日のこれは大したことないぞ？  
良かったら教えようか？」

「ほんと!?嬉しいわ!ね、しいちゃんも…」

「私は別に…」

「志歩ちゃんも遠慮しないで?…私も一緒に教えて欲しいですし…」

「はは、穂波に教えることはもう無い気もするんだが…ま、承りましたよ。」

そうしてしばらく雑談し、

「んじや、遅くまで世話になったな。」

「うん。ありがとうね、志歩ちゃん。わざわざ呼んでくれて。」

「別にこれくらい。いつも穂波に頼ってる分だから。…じゃ、また明日。」

「うん、また明日。」

「…それと、土郎さん。」

「うん?」

「その…ありがとう。また、来てね。」

「ああ、また行かせてもらおうよ。…もつとちゃんとした美味いやつ作らせてもらおうさ。」

と言って手を振った。

また一つ、影が近づいていた。

五話 女難の相1

(宮女編1)

1人、門の前に立つ赤銅色の髪の青年がいた。  
彼は、息を飲む。その場所とは…

「ここが宮益坂女子学園…」

お嬢様のオーラ、女性しかいないという緊張感、そして…

「おにーさんー！こんにちわんだほーい!!」

瞬速で飛び込んでくる女の子。

「なんでさー！ー!!」

遡ること1時間前…

♪♪♪

10時を過ぎたあたりで突然電話が突然鳴り出した。

「ん？もしもし、えみ…望月です。」

『あ、土郎さん!』

「ん？穂波か？どうしたんだ？何かあったのか？」

慌てた様子だったが…

「その…お弁当を忘れてしまって…」

「あー…わかった。すぐ行く。」

「すみません…ありがとうございます！じゃあ入るには…」

そして冒頭に…

「なんでさー！ー!」

「ほえ?」

「え、えむちゃん、ど、どうしたの!?!って土郎さん!」

と体操服姿の穂波が慌てて来た。

「お、おう。体育の授業だったんだな…」

「ハア…ハア…はい、今からなんですけど…」

と答えるもふと直感で目を逸らしてしまう。

(なんとというか、息が上がっているだけなんだが…)

そんなことが頭をよぎるが振り払って咳払いをして、  
「弁当、これでいいか？ちよつと足りてなさそうだったから付け合わせ増やしといたけど…なんかダイエツトしてたりしないよな？」

「え、そんな！手間をかけさせてすみません！…ただ時間が無くて…」  
「はは、気にすんなって。いつも頑張ってる証拠だろ？それに、今俺が生きてるのも穂波のお陰だ。これくらいさせてくれ。」

「…はい！」

そんなやり取りをしてると、先程えむと呼ばれた子が、

「えーと…お兄さんは…穂波ちゃんの彼氏？」

「なんでさー…ちよつとした居候だよ…」

「ほえ？」

そしてえむがなにか聞こうとしたその時、

「「キヤーーーーーー！！！！」

「今のつて、一歌ちゃんとか希ちゃんと…桐谷さん!？」

その言葉に士郎は顔を強ばらせ、

「今どこからだ!？」

と、それにえむが、

「あそこー！」

と指を指す。恐らく2回の角の教室。

「そっか、さっきまでC組が体育だったから更衣室に…つて士郎さん!?!それは無茶…つてええええええ!!!」

と、言葉を聞いた瞬間、壁を駆け上がる士郎がいた。

(良かった…この世界に来て初めて魔術使ったけど、ちゃんと強化出来てる、な!)

そしてその例の教室、幸い窓は空いていたので、明らかに女子校に場違いな黒ずくめの男をそのまま拳で、

「俺の！大切に！手を出すなら、果てまでぶっ飛ばす！」

「ギエツ！」

と、思い切り壁に殴り飛ばした。だが、

ヒュツつと音がした。腕と胸板を軽く切られたようだ。

「クツ…ナイフか、なら…」

とそのナイフを持つ腕を掴み、そのまま男に刺そうとして、

「士郎…さん?」

その一歌の声を聞き、

(ああそうだ。俺は…)

「全く…気が短いな、俺は。」

と、今度はナイフを奪い、柄で頭と腹を殴り、失神させた。

「ふう…」歌達、無事だったK…:あ」

と後ろをむく。3人しか居なかったが、穂波の話途中までしか聞いてなかったことが祟った。

そこには、着替え途中で半裸の美少女3人が…

「士郎さんの変態!!!」

「なんでさーー!!!」

前途多難、まだまだ話は続く…